石神井台小学校　関町北小学校　関中学校グループ　課題改善カリキュラム　外国語活動・英語

	Ⅱ期			Ⅲ期
	小学校５年生	小学校６年生	中学１年生	中学２，３年生
重点を置く単元・領域・活動	**重点単元** **Lesson5「What do you like?」** **Lesson7「What's this?」** ・「What's this」「It's ～」を用い、何かを尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむことができる単元である。 ・様々なものをクイズの答えの対称にすることができ、インフォメーションギャップをもたせたコミュニケーションの場を設定しやすい。 ・身の回りのものを表す語に多く触れさせることができ、日常的な英語表現に慣れ親しませることができる。	**重点単元** **Lesson5「Let's go to Italy.」** ・中学校でも学習する「What」「Where」「I want to ～」などの基本的な英語表現に繰り返し慣れさせることができる単元である。中学校への連携に適している。 ・行きたい国を友達同士で伝え合う楽しみを味わわせることができ、コミュニケーションへの意欲をもたせやすい。 ・世界的に有名な場所やものの表現に触れさせることができ、英語表現への興味関心の高まりが期待できる。	**重点の活動** **「英語への意欲」** ・言語活動として英語を活動的に使う姿勢を、小学校の外国活動から継続して行う。歌う、話すなど楽しく体験する授業から、書く、読むなどの授業へ移行する。 **「文字」** ・アルファベットや単語を学ぶこと、基本となる文の形を学ぶことに重点を置き、指導する。音で捉えた言葉を文字で可視化していく。	**重点の活動** **「文法の学習と整理」** ・現在形、過去形、受動態、能動態など、より複雑な文法を指導する。基本的な文法のほとんどを２年次に習得させる。 ３学年では文法の整理や表現活動への発展的な移行を行う。 **「表現活動」** ・２学年次には表現活動の入り口として、身の回りの物事を説明するような、条件的な英作文で表現する活動に取り組ませる。３学年次には表現活動の発展として、自分や社会のことについての考えを自由な英作文で表現をする。
身につけさせたい力	**「積極的にコミュニケーションを図る態度の育成」** **「外国語の基本的な音声に慣れ親しむこと」** 友達のことを知ろうとすること。 外国語の音声やリズムに慣れ親しむこと。	**「積極的にコミュニケーションを図る態度の育成」** **「外国語の基本的な音声に慣れ親しむこと」** 友達のことに興味をもって尋ねたり、自分のことを伝えたりしようとすること。 外国語の音声やリズムに慣れ親しむこと。 アルファベットの大文字と小文字の関係に気付くこと。	**「学習への積極的な姿勢」** **「単語と語順」** 会話や発話を主体として英語に慣れ親しみ、挑戦しようとする姿勢を養うこと。その中で、日本語と英語の語順の違いを理解し、簡単な文を作れるようにしていくこと。また、言葉を可視化するために、アルファベットを正確に書く力を養うこと。	**「文法の知識」** **「表現力」** 多種多様な文法を取り扱い、知識の幅を広げさせること。表現活動の活性化を行い、意欲の向上と文法の定着・整理を図ること。
指導上の重点	・身近で簡単な英単語や日常的な物の英単語を取り入れる。（これは何ゲーム） ・友達とコミュニケーションを取ることによって答えを導き出せる活動を取り入れる。（○○を当てようゲーム）	・児童がコミュニケーション活動に無理なく取り組めるようキーセンテンスを繰り返し発話する活動を取り入れる。（絵合わせゲーム・ドボンゲーム） ・児童が積極的に関わろうとするコミュニケーションの場を設定する。（空港ゲーム）	・活動的な学習形態を工夫する。 ・アルファベットの書き方や音を徹底する。 ・書く作業の時間を十分に確保する。	・文法学習を説明的に行わない。 ・インプットに偏らず、アウトプットを増やし、発言やペアワークなどの活動の機会を毎回の授業に組み込んでいく。
カリキュラム改善の視点	**・技能の重点化** 中学校へとつながる英語の４技能のうち、「聞く」「話す」に重点を当てた、カリキュラム構成にする。小学校での外国語の目標に沿いながら、中学校への連携を見通して、英語の基本的な表現や音声に慣れ親しめるような手立てを工夫していく。	**・中学校への連携へ向けて** 小学校外国語活動の音声への慣れ親しみから、中学校での文字指導や文法への理解へとスムーズに連携できるように配慮する。外国語活動で高まった英語に対する児童の知的好奇心を刺激するようなカリキュラムにする。新しく学んだことを積極的に活用していこうとする態度・意欲・姿勢を大切にしていく。	**・4技能のバランス** 極端に偏った文字指導への移行により、小学校時の外国語活動との「中１ギャップ」が生じないように、書く・読むばかりでなく、４技能をバランス良く配置するよう計画を立て、指導に当たる。	**・表現活動への接続** 文法学習は受験を意識した問題演習型の指導に偏りがちだが、文法学習と表現活動を常に接続し、会話で使用することで覚えるような授業形態をカリキュラムの基本とする。